

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：33925

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370271

研究課題名(和文)シェイクスピアの近代初期改作と近代論に関する表象文化論的考察

研究課題名(英文) A Study on the Adaptations of Shakespeare and on Their Relationship to Modernity  
From the Standpoint of Cultural Representations

研究代表者

高田 康成 (TAKADA, YASUNARI)

名古屋外国語大学・現代国際学部・教授

研究者番号：10116056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：主に歴史劇とローマ劇の改作との比較研究を通じて、父権的超越性(transcendence)と呼応した歴史的内在性(immanence)の特性と限界を確認するとともに、母権的内在性(immanence)＝「月下圏的自然」と呼応した前近代的「政体」の運命を論じた。近年、進化論的宗教学、歴史哲学、文明史の分野で話題を呼んでいる「枢軸時代」(the Axial Age)――人類史のなかで大宗教が創出された(すなわち超越transcendenceと内在immanenceの認識が誕生した)紀元前一千年の期間――に関する研究を加味するならば、日本近代のシェイクスピア受容をより緻密に検討することができる。

研究成果の概要(英文)：Through the analysis of the Histoirs and Roman Plays, the present study reconfirmed the characterisitcs and limits of the "masculine transcendence/immanence" complex, dealing at the same time with the fate of the "natural immanence/ body politic" complex in the modern times. Taking into account the insights the so-called "Axial Age" debates have given us, the present study is to pave the way for a theoretically valid platform on which to discuss the problems of Shakespeare reception in modern Japan.

研究分野：英文学

キーワード：シェイクスピア 改作 近代 政体 超越 内在 権力 枢軸時代

### 1. 研究開始当初の背景

17 世紀におけるシェイクスピアの改作は一般に改悪とされているのにたいし、17 世紀史観は一般に「世俗化」あるいは「近代化」のプロセスとして発展的視点において捉えられるのが常である。近代という発展史観に立つとき、時代は進展するが演劇の創造と受容は逆に衰退する局面を示す。シェイクスピアの受容史における、陰と陽はつとに指摘されてきたところだが、特にこの 17 世紀後半から 18 世紀前半における(近代史観から見た)衰退は、20 世紀における決定的な再評価とともに改めて問う必要がある。とりわけ、イギリスの 17 世紀は、「近代」史観にとって、きわめて重要な位置と価値を占めているだけに、注目されねばならない。すなわち、「近代」がほぼ終わったとされる 20 世紀が高く評価するシェイクスピアは、「近代」初期 17 世紀後半において改作をこうむらねばならないほど不評であったという事実は、シェイクスピアの創造性というおそらくは時代を超越するであろう行為と「近代」との関係という込み入った問題に我々を誘う。本研究はその部分に光を当てようとするものであり、一言でこれを要すれば、シェイクスピアに内在する「近代的問題群」を明確化する試みに他ならない。

### 2. 研究の目的

本研究は、第一にシェイクスピア作品の 17 世紀における受容と変容を吟味することにより、シェイクスピア作品が寄って立つ諸前提およびその創造性をあぶり出すとともに、第二にはあぶりだされた創造性と近代初期をめぐってなされてきた「世俗化」論との擦り合わせを試みるものであり、そのことを通じてシェイクスピア作品に内在する「近代的問題群」を明確化することを目的とする。その「近代的問題群」は、領野的に言えば、「主観」(心、意識)、「社会」(公的領域)、「権力」(支配関係)をおもな軸として考察されるが、この「近代的問題群」の明確化に意義があると思われるのは、それが近代初期以降の西洋文化圏でのシェイクスピアの受容分析に有益なばかりでなく、非西洋文化における受容と変容を分析する上で不可欠の知見となるからである。

### 3. 研究の方法

本研究は 3 年計画で進められる。シェイクスピアの原作とその 17 世紀の改作(N. Tate と J. Dryden)都合 8 作品を対象を絞り、新歴史主義的な視点から原作と改作のそれぞれに窺える社会・歴史的な言説空間の構成を比較検討しながら、改作において失われるにいたった特質を分析的に炙り出す作業をまず行う。そのうえで、近年の「近代論・世俗化論」の成果を種々検討して、との議論と構造を念頭におきながら、上で

炙り出されたシェイクスピアの特質とのあいだで、学際的な観点に立つてすり合わせを行う。上記二つの段取りの双方において、議論を公のものとするためには、国内・国外の研究者との討議が不可欠となる。改作について新たな視点から検討を行っている研究者、近代論・世俗論との関連でシェイクスピアを論じている研究者を中心にして、知見を摂取しながら議論を戦わせる。

### 4. 研究成果

17 世紀におけるシェイクスピアの改作は一般に改悪とされているのにたいし、17 世紀史観は一般に「世俗化」あるいは「近代化」のプロセスとして発展的視点において捉えられるのが常である。近代という発展史観に立つとき、時代は進展するが演劇の創造と受容は逆に衰退する局面を示す。シェイクスピアの受容史における、陰と陽はつとに指摘されてきたところだが、特にこの 17 世紀後半から 18 世紀前半における(近代史観から見た)衰退は、20 世紀における決定的な再評価とともに改めて問う必要がある。とりわけ、イギリスの 17 世紀は、ひろく文明史のみならず「近代」史観にとっても、きわめて重要な位置と価値を占めているだけに、注目されねばならない。すなわち、「近代」がほぼ終わったとされる 20 世紀が高く評価するシェイクスピアは、「近代」初期 17 世紀後半にあって、改作をこうむらねばならないほどの存在であったという事実は、シェイクスピアの創造性(という通常おそらく時代を超越すると信じられている能力)と「近代」との関係という、やや込み入った問題に我々を誘う。これがシェイクスピア作品に内在する「近代的問題群」と冒頭に言った事態である。

『リチャード二世』とネイアム・テイト(Nahum Tate)による同名の作品(1681)を例に論じるならば、「改作」が示唆するもっとも重要と思しきところは、超越的価値を盛る器・装置が有していた重層性と包括性の後代における縮減と硬直化ということであろう。これは要するに「世俗化」という現象をただ拙劣に表現したにすぎないと思われるかもしれない。しかし、ただ「世俗化」というだけでは、ここで「重層性」が肝心だということは伝わらないだろう。シェイクスピアのリチャードは、一方で神授の王権を身に体して救済史に係らねばならない存在であると同時に、他方、王国の財政を破たんさせた末に、国土すべてを小作に貸し出しても平然として恥じない大地主になりさがる。しかしリチャードは一人の同一人物なのである。(この超越性の重層性と包括性は、王冠を象徴として、後のヘンリー四世たるポリングブルックそしてその後を継ぐことになるヘンリー五世にも、程度の差こそあれ、通底する。)そうして

まさにこのような重層性こそ、「改作」のリチャード二世には容易に見いだすことのできない特徴なのである。リチャード二世だけではない、「議会」というポリングブルックが後盾にしようとした権力装置もまた、超越的重層性に与ることがないのである。

縮減し硬直化するのには、超越的価値を盛る器・装置が有していた重層性と包括性ばかりではない。登場人物を象るいわゆる「性格」もまた同様の变化をたどることになる。原作のリチャードおよびポリングブルックに見える性格の重層性は、「改作」においてはもはや望むことができない。原作リチャードの心象風景にあった平民との葛藤は、改作において新たに書き加えられた「平民と扇動者」の一場を通じて、心象風景からいわば分節化・外在化されてしまうことになるし、ポリングブルックの心象風景にあったであろう平民へのおもねりもまた、「議会」の一場により同様に彼の心象風景から分節化・外在化される運命にあった。シェイクスピアに代表される英国ルネサンス演劇が世界演劇史に誇るともいえる「性格」という器・装置の妙味は、超越的重層性と連動して、ここにすでに衰退を見ることになる。

以上、『リチャード二世』の原作と改作をめぐって若干の考察を行ったわけだが、そこから我々は以下の二つの現象を抽出したとすることができる。A. 超越的価値を盛る装置が有していた重層性と包括性の縮減と硬直化、B. 「性格」という装置が有していた重層性と包括性の分節化・外在化。そしてこのことは、ひとり『リチャード二世』に限らず、そのたの「改作」においても同様に見ることができる。たとえば『コリオレイナス』のテイトによる改作『国の忘恩』(The Ingratitude of A Commonwealth)における登場人物ヴァレリアの変貌ぶりを見よ。ところで、これら両現象が「近代」という時代動向を特徴付けるものであることは言を俟たない。A. はマックス・ヴェーバー流に言えば「魔術剥奪」ということになるだろうし、B. は自然科学一般がなべて志向したところである。17世紀の(そして18世紀前半の)「改作」は「近代」という運動に恭順の意を表したものに他ならない、ということになるだろう。しかし、幸いなことに言おうか、19世紀後半ごろから漸く盛んになった「近代」批判の動向と歩みをともし、改作は省みられなくなり「原作」主義が当然のものとなる。

これを要するに、20世紀以降のシェイクスピア観というのは、「近代」と「近代批判」という弁証法的なダイナミズムを内包した構造をもつということに他ならない。シェイクスピアの作品自体がすでに「近代」の潮流にたいして予見的に批判的であった

かどうかは、事を必要以上に複雑にするのでここでは問わない。(ただし、新歴史主義の遺した功績の一つだと思うが、シェイクスピアには中世的世界像にある確固たる秩序を覆すエネルギーに満ち溢れていることは確かであり、そのようないわゆる「過渡期」につきものの弁証法的構造は見取れる。)要は、後代に「近代」的に「改作」される非重層化・分節化運命にあったシェイクスピア作品は、さらに下って「近代批判」の動向のなかで復元復活し、そればかりか世界的に時代を映す鏡にまで祭り上げられて今日に至っている、ということなのである。いずれにせよ、「近代」と「近代批判」という弁証法的なダイナミズムを内包した構造(シェイクスピアの「近代的問題群」)が、現在の日本をも含む「われわれの」シェイクスピア観の前提になっていることは、繰り返し確認されなければならない。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

TAKADA, Yasunari, "Against the Grain of *Reductio ad Japonicum*," *Journal of Japanese Philosophy*, Vol. 2 (2015), pp. 1-6.

TAKADA, Yasunari, "The Japanese Modern Project Faces Globalization," *Japan Studies in Classical Antiquity* (The Classical Society of Japan), vol. 2 (2014), 1166-171.

TAKADA, Yasunari, "La Diffusione di Virgilio e Horazio, ovvero la letteratura latina al di là della cultura," *Aspetti della fortuna dell'antico nella cultura europea: Atti dell'ottava Gironata di studi*, a cura di S. Audano (Il Castello Edizioni, 2013), pp. 98-112.

TAKADA, Yasunari, "Now Something Completely Different?: Modern, National, Global," the British Council Symposium, 4<sup>th</sup> October 2013, the British Embassy.

[学会発表](計 3 件)

TAKADA, Yasunari, "Against the Grain of *Reductio ad Japonicum*," at the conference in celebration of *Japanese Philosophy*, 8<sup>th</sup> January 2014, the University of Tokyo

TAKADA, Yasunari, "The Importance of Being Eurocentric, Sometimes," in the Symposium "Shakespeare an/in Japan: in celebration of the 450<sup>th</sup> Anniversary of the Bard's Birth, the

British Embassy on 18<sup>th</sup> April 2014.  
TAKADA, Yasunari. “Valeria’s  
Speechless Eloquence: *Coriolanus* and  
the Liminality of the Roman World,”  
13<sup>th</sup> March 2013, University of Huelva  
(Spain), SEDERI conference

〔図書〕(計 2 件)

高田康成 「外地論への序章、主  
体、甘え、インティマシー」、『外地と  
表現』水田編(城西大学出版会、5月),  
pp. 3-34.

TAKADA, Yasunari. “Japan” in *The  
Virgil Encyclopedia*, edited by R.  
Thomas and J. Ziolkowski (Wiley  
Blackwell, 2013), Vol. III.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 康成 (TAKADA, YASUNARI)  
名古屋外国語大学・現代国際学部・教授  
研究者番号: 10116056